

平成 29 年度自己点検・評価報告会 質疑応答（要旨・抜粋）

(H29. 12. 25 開催)

1：滋賀大学の現状分析と今後の課題

Q. (学生の質問)

データサイエンス学部を軸として教育学部と経済学部を融合させる「文理融合」を実現させるために、具体的にはどのような行動を起こすのがよいと考えますか？

A. (位田学長)

大学は、データサイエンスという新しい学問分野ができたのを機会に、学生諸君にもその基礎知識を養ってもらいたいと考えている。そこで、今年度はデータサイエンスの入門科目を全学共通教養科目として開設した。できるだけ早く、かつ広く、経済、教育の学生がデータサイエンスという理科系の科目を学び、ガンマ型の人材として育てほしい。一方、データサイエンスの学生も、教育や経済の科目を学んで、データサイエンス以外の文系の知識を取り入れてほしい。そういうことが可能なカリキュラム構成を考えている。学生諸君も積極的に関心を持って、データサイエンス、経済、教育科目についてのニーズを積極的に大学側に伝えてほしい。

Q. (学生の質問)

自己点検・評価報告書要旨のなかで、「社会の中の大学」の役割として、「滋賀大学は国立大学の類型区分のうちの第1類型である地域貢献型を選択している」とあるが、具体的にはどのような取組が行われているのでしょうか。

A. (三ツ石理事)

学生教育を通じて、教育学部、経済学部、卒業生は出ていないがデータサイエンス学部において、地域の教員養成、人材育成という点において地域に貢献しているほか、研究面においても貢献している。また、社会連携研究センターを通じて、社会人の方の人材育成支援、地域の企業の成長支援を行っている。特に昨年度からは DS 学部と DS 教育研究センターを中心として企業等と連携協定を結び、地域の課題解決やシーズの積極的な掘り起こしに取り組むことで、社会貢献・地域貢献を展開している。具体的には、滋賀県から委託を受けて、県民の健康寿命を延伸させるためのデータ活用に関する研究を始めたり、小学生を対象とした「子どもプログラミング教室」を開催したりしている。また、特に地域というわけではないが損保会社と共同研究を展開している。

Q. (同窓会の要望)

学長の示されたイノベーション構想について、これからの大学を展望すると、大変有意義であり、ぜひ具体化、実現化して欲しいと考えるし、評価している。同窓会としても達成にむけた支援をしていきたい。おそらく、大学の財政状況を考えると総論としては、カリキュラム再編等はやむを得ないと思うのではないかと思うが、学生、教職員へのイノベーション構想の理解・徹底が必要である。イノベーション構想実現に向け意欲的かつ慎重に進めてほしい。

A. (学長)

従来、教育学部では120名、経済学部では100名を超える教員が配置されていたが、その人員を確保する財政基盤がなくなったため、人員を減らざるを得なくなっている。人員を減らしても、教育・研究の質を維持するには、縮小するというよりも、何が基本で何がプラスαなのかを、教育・経済学部に検討いただき、カリキュラムを人員に合わせて再構成していただくようお願いしている。第3期の6年間でどうするというわけではなく、より長期的な滋賀大学の発展を考えるとどういう体制でやっていくのがよいかを考えていただきたい。大変な作業であることはわかっているので、できるだけのことを相談しながら進めていきたい。

2：学部・附属施設の現状分析と今後の課題

Q. (学生の要望)

石山キャンパス内の学習環境に関して、

- ・24時間勉強のできる施設を増やしてほしい。
- ・ALC(創造学習センター)の使用時間が19:00までしか使えずグループワークがほかにできる場もなく困っている。せめて図書館と同じ21:00まででいいので使用時間を延ばしてほしい。

(また、その他、石山キャンパス内の施設や環境の整備、生協に関する要望)

A. (渡部教育学部長)

学習室は3室あり、24時間開放しているので有効活用して欲しい。学習室は、休み期間中や土日でも冷暖房利用可能である。ALCは、試験期間前など一定期間は21時までの利用が可能であり、教室も利用申請手続きを行えば21:00まで使用できる。ただし、教室は、休み期間中や土日は空調用リモコンの貸出をしていない。

利用時間の延長については、意欲的な申し出なので前向きに考えたいと思うが、学習環境の改善と学生さんの安全確保という両面から慎重に検討していきたい。

石山キャンパス内の施設や環境の整備、生協に関する要望については、2018年1月の学部長オフィスアワーや学内掲示等で回答する。

Q. (学生の質問)

滋賀大学の理念である「地域に根差し、グローバルな視野を持つ人材育成」に関して、グローバル人材育成コースの設置や英語教育の推進等でグローバルな活躍のできる能力を養う機会が十分に与えられていますが、グローバルに活躍するにあたって求められる英語のスコアの種類は、TOEICやTOEFL、GMATなど異なっています。そういった留学に必要な条件を知る機会や、TOEICやTOEFLなどの講座や授業などが受講できるのであれば開講していただきたい。

A. (小倉経済学部長)

これまでのグローバル人材コースにおいては、国内学生は1学年10名程度ということで運営してきた。留学条件の提示は、国際センターが交換留学に必要なスコアを公表している。また、指摘されているような教育の強化は必要であると経済学部としても認識しており、大学としても重要視している点である。

対応としては、全学的には本年度よりネット上の英語学習システム=アカデミック・エクスプレスが導入されている。経済学部においてもTOEIC用学習システム=ネットアカデミーを更新導入している。また講座ということでは、今年度より、1年生60名を対象とした単位外の夏季集中TOEIC講座を開始している。春季休業中には、その完走者を対象に上位者にはTOEFLを念頭に置いたスピーキングクラス、それ以外の方にはTOEICスコアアップを目指す講座を開く予定である。また2年生40名程度を対象としたTOEIC講座も開く予定である。そのような試みの評価を行ったうえで、今後「英語演習」の科目を活用した枠組みで整備していくことが可能か検討していく。

Q. (学生の質問)

データサイエンス学部の学生ですが、毎日の授業を通して、専門的なデータサイエンスの知識の必要性和社会からの需要を感じています。しかし現段階でのデータサイエンスに関する大学院についての情報が少なく、進路を考えるうえで不安があります。少しでも結構ですので、情報があれば教えていただきたい。

A. (竹村データサイエンス学部長)

本学では、平成31年度に定員20名で大学院データサイエンス研究科を設置する方向で、現在、文部科学省と協議している。また、現在のDS学部1回生が卒業する時点で大学院の定員増を行う予定である。なお、DS大学院については、ニーズ調査の際に使った大学院構想を示したパンフレットがあるので、希望者に配付する。そのほか、不明なことがあれば、各教員に質問して欲しい。

Q. (同窓会の質問)

学長のデータサイエンスを基礎として、教育学部と経済学部を逆πの字型の足の部分とする構想について、πの足の部分が平行に発展していくことが大学全体の発展において大事であるが、大津、彦根という物理的な距離にある2つの学部について、また、学生の単位交流について、どのような構想を持っているか。

教育学部の地域連携は地味な問題であるが、今後、教育学部や教職大学院においてどのような形で地域連携を行うつもりか。また、滋賀県の教育レベルをあげる役割が教育学部にはあるが、他の大学と異なる滋賀ならではのどのような特色を打ち出すつもりか教示願いたい。

A. (位田学長)

2つの学部がそれぞれDSを取り入れて発展していくことが大切である。教育学部ではカリキュラムの縛りが強く、学生がDS科目を履修することが難しいが、できる限り教育学部の学生にもDS科目を提供していきたい。2つのキャンパスを1つにすることは現実的には困難であるが、どのようにすれば、物理的な距離のある2つのキャンパスを実質的に大きな一つのキャンパスとして利用できるか考えていきたい。すべての学部が滋賀大学の一部であると考え、できるだけいろいろな機会をすべての学部に同様に提供していきたいと考える。

A. (渡部教育学部長)

細かな地域のニーズを取り入れ、県や市町の教育委員会と連携を進めていきたい。学部、教職大学院、附属学校と一体となって、教員養成だけでなく、現場の先生方の再教育を含めた研修機能を強化し、地域から意義を感じていただけるような教育学部、教職大学院、附属学校になりたいと考える。

3 : 各センター等の現状分析と今後の課題

Q. (同窓会の要望)

滋賀大学とJCMUの関係が希薄になっている。滋賀大学の財政上の理由により、TOEFLの対策講座を打ち切られている。2016年度より無料のTOEFL講座を実施しているが参加者が少ないのが現状である。また、JCMUの国内留学制度について、2011年度参加者も累計で37名と少ない状況にあり、大学あげてグローバル化を標ぼうされるなら、ぜひJCMUを利用して欲しい。

情報公開について、シーズ集を企業側から重用させていただいているが、更新をしていない情報があり、毎年更新をお願いしたい。DSには世界的な研究者もいるので、シーズ集という形にとらわれず、その都度WEB上等で発表してほしい。滋賀大学にとって外部資金の導入は重要な課題であるが、企業側にとって寄附はリターンのある投資なので、情報提供をいただきたい。

A. (岩上国際センター長)

JCMUに関する情報について、学生に提供することを徹底していきたい。また、留学派遣の際のTOEFLの語学レベルの評価を厳しくし、不足する学生には、JCMUのTOEFL講座の受講をすすめたい。

A. (神部社会連携研究センター長)

我々も、本学教員の研究シーズを社会の方に知っていただきたいと考え取り組んでいる。今後も最新の情報への更新と分かりやすい情報提供を心掛けていきたいと考える。